

ふれあいの橋の会

REPORT さかい

さかい幸朋苑の全貌

と き 2026年10月15日(木) 10:00~11:40

訪問先 介護老人保健施設さかい幸朋苑、ケアハウスさかい幸朋苑 境港市誠道町2083

出席者 【委員】 川口 昭一、中本 勝、植田建造、遠藤博江、遠藤恵子

【さかいエリア】 渡部 信之 (介護老人保健施設さかい幸朋苑 施設長・医師)

大塚 正晃 (介護老人保健施設さかい幸朋苑 介護課長

兼 ケアハウスさかい幸朋苑 施設長)

村田 直人 (介護老人保健施設さかい幸朋苑 相談員)

三島 直子 (ケアハウスさかい幸朋苑 主任)

【法人本部】 荒井 祐二 (監 事)



Sakai Area Report

荒井監事：今日は、1992年4月に開設した「老人保健施設さかい幸朋苑」と「ケアハウスさかい幸朋苑」を見学していただきます。10月10日(土)には、ナマステホールを会場に、「さかい幸朋苑の秋祭り」が開催され、多くの皆さんが参加され大変賑わっていました。はじめに、さかい老健の施設長兼医師の渡部先生から「さかいエリアの医療介護の現状・老健の役割と取り組み」を話していただきます。(要約内容を掲載します。)

■さかいエリアの医療介護の現状、老健の役割と取り組み

渡部施設長：配布しました資料を基に説明します。

入所施設の違い：特養、ケアハウス、グループホームなどはほとんどの方が一生入る施設で、申し込んでも空きがなく、数ヶ月で入れれば早い方、多くは年単位で待つ。これに対し老健は、リハビリを行って自宅に帰ることを目的とする施設であり、法律にも明記されている。繰り返しの入所も可能。

老健の機能：病院から退院するが自宅での介護に不安がある場合に、数ヶ月リハビリをしながら介護方法を考える。介護者が急病や事故に遭った場合のレスパイトにも対応する。ショートステイは短期間で情報も少なく対応が難しい場合がある。過去には、午前中に奥様が交通事故で緊急入院し、午後に入所した事例があった。行き場のない人になるべく受け入れる、急性期病院に近い機能を果たす必要がある。

出口の重要性：慣れると「ずっとここにいたい」という方が多いが、それに応じ続けると他の施設と同様に空かなくなり、急に必要になった人が入れなくなる。出口を上手に調整する必要がある。



期間限定の入所：介護度の高い人で、夏は熱中症や脱水、冬はストーブの危険や積雪でデイサービスやデイケアに行けなくなる場合に、冬場だけ入所するなどの利用もある。

ケアの変化：以前は「夜中に何回もおむつ交換」が売りだったが、現在は夜中に何度も替えるのは虐待ではないかと言われる。本人の希望に沿わないケアは、法人の掲げる「自分の受けたいサービス」にそぐわない。

看取り：急性期病院は医療が少ない看取りの患者には職員があまり行かず、コロナ以降は面会制限、部屋の移動も多く、寂しい看取りになりがちである。施設は入浴や散歩を亡くなる前日まで行うなど綺麗に看取れており、幸朋苑に来て一番驚いたこと。家での看取りは介護力の高い家庭でないと難しい。

法人の強み：多様な施設を持つ法人であるため、次の入所先へ移っていただきやすい。

全老健・地域包括ケアシステム：厚生労働省が進める地域包括ケアシステムに沿い、老健を中心に通所リハ・訪問リハ・ショートステイを組み合わせ、地域で暮らし続けられるよう各機関が協力する方針。

エリア内の連携状況：老健から、ケアハウス、グループホーム、特養、サービス付き高齢者住宅（シニアステイなど）への紹介実績を資料で示した。コロナの影響で動きが鈍くなったが、現在はだいぶ回復している。

ケアハウスとの連携モデル：長期入院の方はケアハウスの居室を一旦退居し、退院時は老健で待機していただく。利用者は居室費と入院費の二重払いがなくなり、ケアハウス側も「入院空床」（居室料のみで介護料が入らない状態）による減収を防げ、老健も回転率が上がるため、皆にメリットのある仕組み。

実績データ（令和5年～7年）：入所元は病院からが多く、済生会病院が半分以上を占め、次いで元町病院、米子の病院。退所先は、自宅に帰る人がもっと多いのが理想だが、すんなり帰れる人は少ない。看取りを積極的に受けているため、施設で亡くなる方も多い。



■ケアハウスにおけるサービス 品質向上に向けた取り組み

荒井監事：毎年 3 月に開催されている法人研究発表会で、さかいケアハウスでの取り組みが報告されています。現在は、さかい老健所属の村田相談員から報告をお願いします。

村田相談員：令和 4 年～令和 6 年にケアハウスの相談員を務めていた際の取り組みを報告します。

ケアハウスとは：おおむね 60 歳以上で自宅での生活が難しい方のための共同住宅。介護認定がなくても入居可。1日3食の食事提供はあるが、ケアハウス職員は基本的に身体介助を行わず、介護サービスを受ける場合はケアマネージャーを通じて契約する必要がある。相談員は入居者の悩みを聞き、健康で明るい生活を送れるよう支援する。

取り組み開始時の状況：入居者の入れ替わりが多く、コロナ禍の真ただ中で入居者同士の交流が少なかった。入居者は男性 7 名・女性 13 名、平均年齢 81.7 歳、自立の方が多く、半数以上の 11 名が入居 3 年未満。

アンケート結果：生活の満足度は「普通以上」が 9 割。一方、入居者同士の交流は半数が「ない/ほとんどない」と回答（入居年数が短い人ほど顕著）。生活の楽しみ・生きがいも約 4 割が「ほとんどない」と回答し、日中の過ごし方に課題があった。ただし、イベントへの参加希望は 7 割が好意的だった。

具体的な取り組み（3 つ） **買い物ツアー**：月 1 回、境港市内の商業施設へ。プラント 5 など行ったが、店舗の大きさや休憩スペースの有無から、丸合ターミナル店が多かった。イートインで休憩でき、交流・外出・気分転換になり恒例イベントとなった。 **ケアハウス内での交流会**：月 1 回、イベントや生活全般をテーマに意見交換。季節行事の企画、楽器が得意な入居者による演奏会、合唱なども実施。互いを知り関係構築に役立った。 **体操クラブ**：週 2 回、昼の時間帯に 1 回 15 分程度、ラジオ体操や認知症予防体操を実施。終了後にお茶やトランプも。談話室で行い、気軽に参加できる習慣となった。

成果・考察：入居者から「みんなと仲良くなれた」「健康的な生活ができるようになった」との前向きな意見があった。散歩や花壇の手入れなど新たな活動が生まれ、体調不良の方を気にかける、新入居者を活動に誘うといった関係性も築かれた。一人ひとりの声に寄り添い、思いや強みを引き出す働きかけに意義があった。ケアハウスは介護保険サービスに縛られず、入居者の立場に立った多様な支援がしやすい施設であり、限られた資源の中で質の高いサービスを目指す。 ③



荒井監事：ケアハウスでの買い物ツアーや交流会、体操クラブの取り組みなどが入居者同士の交流や生きがいづくりにつながったことが報告されました。重度の方が多い施設でも、企画すれば参加者が集まるとの気づきが共有されたと思います。

三島主任：写真に写っていた方々は3年前の状態、年を重ねて体力が落ち、「丸合はもういい」「秋祭りもナマステに出かけるのも今回はいい」という方も出てきています。ただ、活動があると「あなたが行くなら行く」と誘い合って出かけ、地域の方と久しぶりに会って会話が生まれ、普段見られない笑顔を見せることがあり、同行した職員も驚くことがあります。今年の最後の行事として、美保基地の隊員の方をお願いして餅つきをしてもらう予定です。

川口委員：男性の入居者は、女性に比べて少ないのではないですか。

三島主任：男性は2割いないくらいです。男性は、ほとんど遠慮されることが多く、男性同士の交流も少ないです。女性は、自分たちでグループを作り、毎週火曜日はトランプの日として集まっています。

大塚施設長：ケアハウスでは健康麻雀を企画しており、男性も来てくれるのではと考え、12月に開催予定です。頭を使うのも良いとのことで企画しています。

中本委員：ケアハウス入居者は、元気な方もおられるようですが、入居理由は何が多いですか。

大塚施設長：何かあった時に対応してもらえる安心感や、一人での不安、安否確保のために入居される方が多いようです。

三島主任：独居や家族が遠方の方が多く、調理が難しいため食事が1日3食出ることも大きな理由となっています。

植田委員：月1回の買い物では、回数が少ないのではないですか。

三島主任：通院した帰りに買い物をする人もいらっしゃいます。

荒井監事：他エリアでは、移動販売車が定期的に来苑し、入居者が買い物をされている光景を見ます。

大塚施設長：昨年、コンビニ関連の運営者から話がありましたが、その後進展していません。

④



■老健・ケアハウスの事業所概要、課題

大塚課長：4 階建ての 2 階が老人保健施設で、3、4 階が**ケアハウス**となっています。4 階は元気な方（一般）が入居し、3 階は特定施設入居者で生活介護が付いています。3 階の特定施設は定員 24 床、一般のケアハウスは定員 26 床で運営。 ケアハウスの課題としては、夫婦部屋の需要が減り、空室が埋まらず、一部屋は改修してシェアハウス型にしましたが、難しい面があります。残りの 5 部屋の活用を検討中です。施設の老朽化も進んでおり、改修の必要箇所が増えています。老健には一昨年から 3 名（フィリピンの 20 代女性）のグローバル人材が配置されています。言葉の壁がありますが、笑顔も良く評判がいいです。早期に夜勤ができるよう育成し、数年後には介護福祉士の取得を目指してもらい、長く働いてもらうことを目標としています。グローバル人材同士での交流を深め、定住につながることを願っています。

村田相談員：老健は、定員 50 名で、現在 46 名（男性 13 名、女性 33 名）が入居。今年は夏が暑く、夏場のみの利用が増えましたが、涼しくなり自宅に帰る準備をする方が多くいらっしゃいます。本日も独居の方 1 名が帰宅予定です。冬に向けて申し込みが増えますので、早く入っていただけるよう支援したいと考えています。

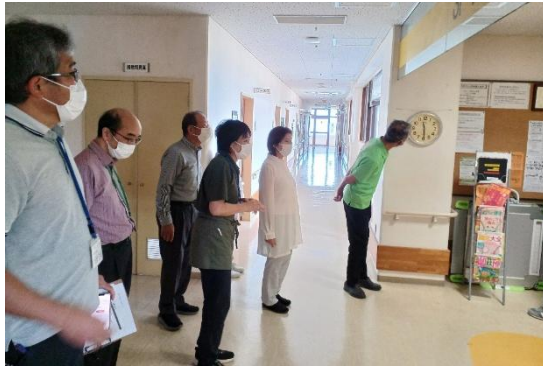
三島主任：ケアハウスは、平均年齢が上がり、100 歳表彰は前年度 2 名、今年度 1 名、来年度も 2 名ほど。最高齢は 103 歳の男性で元気です。夜勤は 1 名体制で、3 階（介護付き）に重点を置きますが、一般の方からのナースコールにも対応し、緊急時は待機の看護師が呼ばれる体制です。入居 10 年以上の方が増え、持病を抱えて自分で通院する方が多いです。入院すると、家賃・病院費用など家族の負担が増え退居せざるを得ない場合がありますが、その際は老健や特養で受け入れ、住まいがなくなる不安を抱えないようにしています。幸朋苑は、複合施設でケアマネージャーが近くにいることが強みとなっています。

荒井監事：三島主任は、看護師であり、夜間は自宅待機し、何かあれば出勤する体制だと思いますが、どのように対応していますか。

三島主任：すぐ電話が取れるようにしていますが、遠出の際は老健の看護師や渡部先生に協力していただいています。連絡が多いのは朝方です。一般の方が朝食に降りてこず、鍵がかかっている場合は 開けるとの約束のもと開けたところ倒れていた例や、骨折後にナースコールが押せず声を上げた例、浴室での転倒事例もありました。

⑤





■施設内外の点検・提言

荒井監事：施設内外を見学していただきました。配布しました評価表（①建物、施設内、周辺 ②職員の態度、接遇 ③ご利用者へのサービス ④地域交流）のチェック項目を照合し、気づいた点を指摘してください。

遠藤博江委員：老健では、プランターに季節の花や多肉植物が綺麗に植えてあり、とても感心しました。

大塚課長：多肉植物は職員が自宅から持参したのですが、入居者と一緒に水やりなどをしています。

植田委員：花を見に歩くきっかけになり、日光浴もできるし、健康につながるのとてもいいことです。

遠藤博江委員：今は、一人部屋でなければならない時代なのでしょうか。

大塚課長：必ずしもそうではないですが、個々のプライバシー保護や時代の流れに沿った対応です。昔の4人部屋は、仲が良くても難しい面があり、個室の方がよいかもしれません。

中本委員：これだけの入居者がいて、事故などはありませんか。車椅子からの転落やベッドからの転落などがありそうですが。

渡部施設長：施設は自宅に比べて事故が多くなります。自宅では慣れた動線で歩いていた人が、施設では一か八かで動かれたり、夜中に朦朧としてベッドから落ちたりします。法人は虐待はもちろん、身体拘束もしない方針です。病院では治療優先でベッドの四方に柵をしたり、車いすに乗るときにはお腹を固定することもあります。施設では禁止しています。そのため転倒や転落の可能性は高く、大腿骨を骨折などで、年に数人の入院があります。しかし、閉じ込められたり縛られたりするの「自分が受けたサービス」ではないため、危険があっても受け入れる、という考え方です。

川口委員：皆さんの元気な顔を見ることができ、良かったです。秋祭りの日にも、知り合いの方に声をかけましたが、元気に過ごされていることは、私たちの喜びにもつながります。

遠藤恵子委員：気候も良く、皆さんの顔色もよく、職員が明るく、清々しい気持ちで見学ができました。

植田委員：秋祭りでは、ナマステホールに施設入居者やデイサービス利用者など大勢集まっておられ、感動しました。境港総合技術高校生徒のボランティア 13 名の協力もあり、助かりました。

荒井監事：次回は、11月19日（土）10：00～ **ダイケア** の見学を予定しています。